

## C . A . T . とエコロジカルな流域づくりプロジェクト最新事情

### - エコディフィ・プロジェクト -

糸長浩司

日本大学生物資源科学部教授 / パーマカルチャー・センター・ジャパン代表

B I O C I T Y で度々紹介している英国ウエールズの C . A . T . が位置し積極的に関与している、バイオリージョン的流域での住民、企業、N P O、行政のパートナーシップによるエコロジカルな流域活動であるエコディフィプロジェクトに関する報告である。

30年前にスレート発掘の廃抗地が、若者達のエコビレッジづくりのモデル地として選ばれ、C . A . T . の試みがされた時には、何も無い地域であった。その後の C . A . T . の活動展開の中で、C . A . T . 及び元スタッフ達の先進的な試みや、サステナブル技術開発とその起業化等に刺激され、C . A . T . の位置する流域での、多様な主体の連携によるエコロジカルな流域活動が始まっている。このバイオリージョン的な活動の背景には、地域の経済・社会・環境のサステナビリティの追求、風力や木質チップ等の再生可能エネルギーでの地産地消的にエネルギー政策等の E U の総合政策や、ウエールズ政府によるコミュニティ再生のテーマがあり、現在、そのモデル的な地域活動としてエコディフィは注目されている。

筆者が2003年秋に参加したウエールズでの「グリーン・ヒーティング国際会議」(別の機会に報告予定)は、エコディフィのエリアがまたがるポイ州が設置したポイ州エネルギー機構(第3セクター)がウエールズ開発局や E U の再生エネルギー普及活動基金を得て開催したものであり、C . A . T . やエコディフィプロジェクトが先進事例として紹介されている。この国際会議を主催したポイ州エネルギー機構や、ダラスエネルギー会社、エコディフィ等のメンバーには、元 C . A . T . スタッフが中心的な役割を果たしている。

ここでは、C . A . T . が深くかかわるエコディフィプロジェクトについて報告する。

(以下の報告資料は、エコディフィのマネージャー、アンディー・ローランドの資料及び、エコディフィのホームページ、現地調査による。)

C . A . T . のあるマツハニレス町を含むディフィ川流域は、流域面積740 km<sup>2</sup>で、7つの地方自治体で12,300人、6割がウエルッシュ語を話すウエールズ文化を復興している地域で、経済は牧畜の家族経営農家とツーリズム業が主要な地域である。流域の課題と特徴には、農業収益減、口蹄疫による経済的危機、若者流出、コミュニティの変貌、環境破格(景観と生物生息環境)、言語と文化復興、持続可能な技術と経済振興(C . A . T . が関連している技術開発等)がある。

エコディフィは、ディフィ川流域での持続的なコミュニティ形成で結成された非営利団体であり、流域での多様な組織と個人参加でコントロールされている第三セクター的会社であり、現在はまだ非営利団体として登録はしていない。構成メンバーは、地域住民、民間会社、ボランティア団体、地域自治体、国立公園、ウエールズ開発局等で50人以上の個人と7つの地方自治体を含む14の団体から構成されている。理事会は、12人の理事と二人の専従理事で構成されている。エコディフィの構想は、元、C . A . T . のメンバーであり、現在エコディフィのマネージャーであるアンディ達によって1997年に発案され、1998年に組織として誕生した。当初は、ポイ州議会及びダラス会社(C . A . T . とのパートナーシップの関係にある代替エネルギー開発会社であり、マツハニレス駅前のディフィ・エコ・パークの産業団地に事務所を設置)の数名が発起人で進められたが、その後は、地域住民による運営となってきている。ウエールズ開発局の審査報告によると、エコディフィは、単なる「環境経済」の視点だけでなく、広くコミュニティ再生のための包括的なグループになるべきであると指摘している。

#### エコディフィの活動理念とビジョン

エコディフィの活動理念の基本は、持続可能なコミュニティの再構築にある。地域のニーズは長期なビジョンと調和し、地域固有の環境の持続性だけでなく、地球レベルでの持続性に注意を払う必要があり、また、地域経済の強固さや、地域住民が責任をもって行動する能力の向上を目的としている。

地域経済を強化し、地域社会の文化的価値を高め社会的ニーズと環境的課題を調整する。

地域個性の強化

新鮮でグリーンな環境イメージの地域づくり

長期的なビジョンと調和した地域的現在のニーズを達成される

経済の再地域主義（レ・ローカリゼーション）の構築（サステナブルツーリズムとサステナブル農業の確立）。生産と流通のグローバリゼーションは資源の非持続的な利用となり、廃棄物を生産し、地域の固有の経済が外部からの刺激に対して弱くなる。この傾向の逆を「レ・ローカリゼーション」という。

食糧、ホリデーとそのほかの生産物は、流域の環境に対するイメージを向上させ、この流域が持続可能なコミュニティ再生のリーダーとなる。

#### 具体的な活動内容

エコディフィが熱心に進めている活動の主要なものには、再生可能エネルギー開発とその活用や、サステナブルツーリズムがある。これらの主要な活動資金は、ウエールズ開発局のコミュニティ再生事業バック基金であり、ウエールズ政府の地域再生事業の一環に位置づけられている。

#### 再生可能エネルギー開発と活用

再生可能なエネルギー開発と活用はエコディフィの主要な活動テーマである。1950年代から水力発電は利用されているが、電力はまだ外部からの輸入であり、年間で地域エネルギー経済は400万£である。近年は、近年商業ベースでのウインドファームが地域需要を賅えるほどの規模で設置されてきているが、暖房等のヒーティングエネルギーはまだ外部からの輸入状況である。

このような中で、地域でのコミュニティベースで出来る水力発電、ソーラー、風車、木質バイオマスエネルギー開発が活動目標となっている。地域のエネルギー経済をグリーン化する試みである。地域経済に30万£の経済効果を生みだしている。活動基金はEUの地域開発基金・再生エネルギー開発基金等、ウエールズ開発局及びポイ州の資金援助、ダラスエネルギー会社（C.A.T.の関連する姉妹会社）やシェル・ベター社からの資金援助等である。現在までの主要なプロジェクトは次のようなものである。農場での120KW水力発電システム、コミュニティ風力会社設立での75KWの風車設置（ここで生産した電力の半分はC.A.T.に売電される。）ソーラー発電、ソーラー温水システム、木質バイオマスエネルギー活用でのチップボイラー等の普及活動である。これらの活動成果として、ECでの「ベスト・コミュニティパートナーシップ2002年」や、英国王立都市計画協会から表彰され、かつ、エネルギー消費削減のための「エネルギー供給トラスト」の地域エネルギー基金等を得ている。

#### サステナブルツーリズム

地域経済の主要な産業になりつつあるツーリズムの持続性に関する活動である。持続可能なコミュニティに支えられたツーリズムの実現を目指している。2000年に中心的グループが結成され、現在は、地域経済振興、環境保全、地域文化や遺産の保存継承をめざして、ウエールズ地域でのツーリスト開発、グリーンツーリズムの先進事例地として位置づけられ、ツーリズム開発基金（6年間で50万£）を得ている。ツーリストの活動調査、ツーリズムネットワーク開発（宿泊のネットワーク化、共通のマーケット戦略、ガイドネットワーク、サイクリングロード整備、イベントネットワーク、乗馬ネットワーク等）地域の自然と文化遺産を解説するビジターセンターの充実等である。

これらの活動以外には、次のようなものがある。

廃棄物の減量化：各家庭や地域組織との協力による、家庭廃棄物の減量化である。

コミュニティ・ファースト：ウエールズ議会政府の第一の政策で、貧困対策であり、貧困地域に暮らす人達の暮らしを改善への支援である。地域住民自身が、自らのニーズを理解し、それを実現することを支援することにあり、そのコミュニティ再生の活動の一翼をエコディフィは担う。

10代青少年対策：青少年のためのスポーツ施設等の整備による青少年の暴力的な行動に対する対策。

交通対策：地域住民、旅行者にとって、公的な交通機関やコミュニティ交通システム活用による快適な移動手段の確保等。

#### 森林保護活動

フェアートレード：第三諸国経済支援のためのフェアートレード運動。

ブロードバンド通信の改善：ブロードバンド通信の阻害地域の解消策。

情報とアドバイスセンター機能：マッハンレニス町にあるエコディフィ事務所を拠点としたアドバイス活動や調査情報発信活動。エコディフィのニュースレターやホームページの運営等

30年前にウェールズの過疎化の激しい山間地域に移住してきた若者達が始めた、オルタナティブな暮らしづくりの実践活動は紆余曲折を経ながらも、現在は、C.A.T.として世界的に有名な環境教育センターとして開花した。それだけでなく、エコディフィプロジェクトのように、バイオリージョンでの環境・経済・社会のサステナブルな再構築に向けた地域的、社会的な活動の主要な一翼の役割を深めてきている。彼らの小さい活動であるが、そのエコロジカルな理念と地道な活動が、地域社会、行政と密接な関係をつくり、バイオリージョン的なエコロジカル地域づくりへと発展してきている。既成の自治体的な枠組みを越えて、バイオリージョン的な枠組みの中での、環境・経済・社会の三位一体的総合化の元に、コミュニティを含めた多様な主体の連携による協働的で持続性高いエコロジカルな活動へと発展してきていることのすばらしさを痛感する。この事例は、わが国でのサステナブルやエコロジーをテーマとする各地域でのNPOが、地域社会と密着し行政的枠組みを越えて、バイオリージョン的な領域での環境・経済・社会のサステナブルな再構築のために果たしていくべき方向を示唆してくれる。



写真1 C A Tのエコキャビン



写真2 C A Tのソーラーエネルギー学習コーナー



写真3 エコディフのエコ工業団地



写真4 エコ工業団地内のC A Tの姉妹企業



写真5 小学校に設置された地域暖房のチップボイラー施設



写真6 チップボイラーのデモンストレーション